

# 小学生における学習動機の分析\*

杉村 健・清水 益治\*\*  
(心理学教室)

**要旨:** 大人になって役に立つから、テストで良い点をとりたいから、新しいことを知りたいから勉強するというのが、小学生に共通する学習接近動機である。学業成績の良い者は内的動機、成績の悪い者は外的動機によって勉強する傾向があるが、その関係は学年や教科で異なる。宿題が多いとき、問題がむずかしいとき、授業時間が延びたとき勉強がいやになるというのが、小学生に共通する学習回避動機である。当てられて答を間違えたとき、先生に叱られたとき勉強がいやになるというのが、成績の悪い者の主な学習回避動機である。

**キーワード:** 学習接近動機、学習回避動機、学業成績

本研究の目的は、小学生がなぜ勉強するか、また、どんなときに勉強がいやになるかについて、その実態を調べ、学習指導に役立てることである。そのために、前者については14の質問項目を、後者については17の質問項目を作成して、小学校2、4、6年生に実施し、学年差、性差、成績および知能との関係について分析を行う。

人はさまざまな動機を持っており、その動機に基づいて行動している。そのような動機の中で学習活動と直接にかかわりをもっているものを学習動機とよぶ。杉村(1985)は、その主なものとして、活動、新奇性、達成、承認、集団参加、優越、不安回避といった動機をあげ、同じように勉強していても、その学習動機が異なることを指摘している。ある子どもは新しいことに興味をもち(新奇性の動機)、自分の立てた目標を達成するために(達成の動機)勉強しているし、他の子どもは親や教師からほめられたいために(承認の動機)、あるいは、不安や失敗を避けようとして(不安回避の動機)勉強しているであろう。学習動機には学年差や性差だけでなく、教科や学習内容によるちがいが、さらに学級差があると考えられるが、1人1人の子どもがどのような学習動機をもっているかを的確に把握することにより、その子どもに応じた学習への動機づけが可能になる。

学習動機の実態を的確に把握するために、小学校3年生の自由記述の結果に基づいて具体的な質問項目を作成し、さまざまな観点から研究を行ってきた(杉村、1967、1968、1973; 杉村・栗山、1972; 杉村・藤田、1971; 玉瀬・杉村、1985)。本研究では、以前の研究で用いた質問項目

---

\* Analyses of Motives for Learning in Elementary School Children

\*\* Takeshi SUGIMURA and Masuharu SHIMIZU (*Department of Psychology, Nara University of Education, Nara*)

を若干修正して、現在の小学生がどのような実態であるかを検討する。

その質問項目は“なぜ勉強するのか”という本来の学習動機を調べるためのものであり、また、これまでの内外の研究でももっぱらこの種の学習動機が問題にされてきた。しかし、学習指導に実際に役立つようにするためには、“なぜ勉強がいやになるのか”“どんなときに勉強をしたくなくなるか”といったことを同時に把握しなくてはならない。むしろこの方が子どもの学習への動機づけを高めるのに役立つかもしれない。そこで本研究では、小学校2年生と4年生各1学級ずつの子どもに、どんなときに勉強がいやになるかを列挙してもらい、その結果に基づいて全部で17の質問項目を作成した。“なぜ勉強するか”を学習接近動機とよび、“どんなときに勉強がいやになるか”を学習回避動機と名づけることにし、これら2種の学習動機について、学年差、性差、学業成績および知能との関係を分析するのが本研究の目的である。

## 方 法

**調査対象** 表1に示したように、本研究の調査対象は小学校2年生、4年生、6年生各3学級ずつで、男女合計303名である。

表1 調査対象の内訳（人数）

	学 年			合 計
	2	4	6	
男 児	41	62	51	154
女 児	49	55	45	149
合 計	90	117	96	303

**調査内容** (1) 学習動機——学習接近動機（なぜ勉強するか）および学習回避動機（どんなときに勉強がいやになるか）の質問項目は、以下に示す通りである。

### ＜学習接近動機の質問項目＞

- ① 偉い人になりたいから勉強する
- ② 宿題があるから勉強する
- ③ 先生に叱られるから勉強する
- ④ いろいろ調べるのが好きだから勉強する
- ⑤ 仲間外れにされたくないから勉強する
- ⑥ 大人になって役に立つから勉強する
- ⑦ 親にほめられたいから勉強する
- ⑧ テストで良い点をとりたいから勉強する
- ⑨ 問題を解くのが好きだから勉強する
- ⑩ 新しいことを知りたいから勉強する
- ⑪ 先生にほめられたいから勉強する

- ⑫ 友達に負けたくないから勉強する
- ⑬ 教科書を読むのが好きだから勉強する
- ⑭ 親に叱られるから勉強する

<学習回避動機の質問項目>

- ① 授業が進むのが遅いとき勉強がいやになる
- ② 宿題が多いとき勉強がいやになる
- ③ 問題がむずかしいとき勉強がいやになる
- ④ 当てられて答えを間違えたとき勉強がいやになる
- ⑤ 先生に叱られたとき勉強がいやになる
- ⑥ 宿題を忘れたとき勉強がいやになる
- ⑦ 先生の機嫌が悪いとき勉強がいやになる
- ⑧ 授業が進むのが速いとき勉強がいやになる
- ⑨ 親に叱られたとき勉強がいやになる
- ⑩ 授業時間が延びたとき勉強がいやになる
- ⑪ 問題がやさしいとき勉強がいやになる
- ⑫ テストの点が悪かったとき勉強がいやになる
- ⑬ 気分が悪いとき勉強がいやになる
- ⑭ 授業がわからないとき勉強がいやになる
- ⑮ 忘れものをしたとき勉強がいやになる
- ⑯ 手を挙げても当ててもらえなかったとき勉強がいやになる
- ⑰ 授業がつまらないとき勉強がいやになる

(2) 学業成績 — 1学期末の国語、社会、算数、理科の成績（素点）を調査校から提供してもらった。

(3) 知能検査 — 日本文式 GIT 総合学年別知能検査。

手続き 著者と心理学専攻の大学院生および3、4年生が午前中にそれぞれの教室で実施した。まず、知能検査を手引に従って実施し、そのあとで学習動機の調査を行った。“なぜ勉強するか”と書いた下に1から14までの番号が、“どんなときに勉強がいやになるか”と書いた下に1から17までの番号が書いてある回答用紙を配布し、“はい”のときは○印、“いいえ”のときは×印をつけるように教示してから、質問項目を1つずつ読みあげて回答させた。2年生は昭和63年10月25日、4年生と6年生は10月24日に実施した。

## 結果と考察

学習動機の学年差と性差 表2は学習接近動機について学年別の承認率（「はい」の％）を示したものである。項目ごとに角変換値による3（学年）×2（性）の分散分析を行った。学

年差は項目③と⑥以外はすべて有意になり、表2の合計欄に太字で示してあるように、どの項目も2年生の承認率が最も高く、4年生、6年生と低くなる項目と、4年生で急激に低下する項目がある。仲間はずれにされたくないから(⑤)、親にほめられたいから(⑦)、先生にほめられたいから(⑪)、友達に負けたくないから(⑫)といった外的動機だけでなく、いろいろ調べるのが好きだから(④)、問題を解くのが好きだから(⑨)、新しいことを知りたいから(⑩)、教科書を読むのが好きだから(⑬)といった内的動機も、学年とともに低下する。理論的には外的動機から内的動機へと発達するといわれているが、この結果からは内的動機が高まるとはいえず、これは学習指導の上で配慮しなくてはならない問題である。

表2 学習接近動機の学年、男女別の承認率(「はい」の%)

項目 番号	2年生			4年生			6年生			男児	女児
	男児	女児	合計	男児	女児	合計	男児	女児	合計		
①	95	88	<b>91</b>	60	56	<b>58</b>	47	24	<b>37</b>	67	> 56
②	32	47	<b>40</b>	19	27	<b>32</b>	37	22	<b>30</b>	29	32
③	22	23	<b>22</b>	19	16	<b>18</b>	14	11	<b>13</b>	18	17
④	81	90	<b>86</b>	48	47	<b>48</b>	37	38	<b>38</b>	55	58
⑤	24	25	<b>24</b>	13	6	<b>9</b>	6	2	<b>4</b>	14	11
⑥	90	96	<b>93</b>	90	100	<b>95</b>	96	96	<b>96</b>	92	97
⑦	73	76	<b>74</b>	36	38	<b>31</b>	26	18	<b>22</b>	45	44
⑧	88	96	<b>92</b>	71	82	<b>76</b>	80	73	<b>77</b>	80	84
⑨	46	59	<b>53</b>	23	26	<b>24</b>	14	13	<b>14</b>	28	33
⑩	93	96	<b>94</b>	71	71	<b>71</b>	59	60	<b>59</b>	74	76
⑪	61	80	<b>71</b>	16	24	<b>20</b>	12	7	<b>9</b>	30	37
⑫	68	86	<b>78</b>	55	58	<b>56</b>	35	49	<b>42</b>	53	< 64
⑬	46	67	<b>58</b>	11	24	<b>17</b>	18	13	<b>16</b>	25	< 35
⑭	32	29	<b>30</b>	19	9	<b>15</b>	33	9	<b>22</b>	28	> 16

次に、3学年をとおして70%以上の承認率を示した項目は、大人になって役に立つから(⑥)とテストで良い点をとりたいから(⑧)であり、この2つが小学生に共通する学習接近動機であるといえる。逆に、30%以下の承認率を示した項目は、先生に叱られるから(③)、仲間外れにされたくない(⑤)、親に叱られる(⑭)であり、少なくとも意識の上ではこのような動機で勉強している子どもは少ない。

学年ごとに14項目の平均承認率を出してみると、2年生から順に65%、40%、34%であり、2年生と比べて4年生と6年生が著しく低い。このことは、4年生と6年生よりも2年生の方が動機づけの手段が豊富であることを示唆する。各学年で承認率が高い方から3項目と低い方から3項目を取り出してみると、高率の3項目は3学年とも一致しており、大人になって役に立つか

ら(⑥)、テストで良い点をとりたいから(⑧)および新しいことを知りたいから(⑩)であり、これらはどの学年でも学習の動機づけとして利用できるものである。逆に、低率の3項目は2年生では、先生に叱られるから(③)、仲間外れにされたくないから(⑤)、親に叱られるから(⑭)、4年生では⑤、⑭、教科書を読むのが好きだから(⑬)、6年生では③、⑤、先生にほめられたいから(⑪)であった。これらの項目は学習の動機づけとしてあまり役に立たないものである。

学年と性の有意な交互作用はどの項目でも示されなかったが、表2に示す4項目において有意な性差があった。すなわち、男児は女児と比べて、偉い人になりたいから(①)、親に叱られるから(⑭)勉強している者が多く、逆に、友達に負けたくないから(⑫)、教科書を読むのが好きだから(⑬)勉強している者は、男児よりも女児の方が多い。これは、男児には親の期待や圧力がかけがちであり、女児では競争心が強いこと、読書が好きなことを反映していると考えられる。

最後に、親と教師の称賛に関する項目(⑦と⑪)と叱責に関する項目(⑭と③)について学年別の平均承認率を出してみると、称賛(ほめられたいから)では2年生から順に73%、26%、16%であり、叱責(叱られるから)では同じ順に26%、17%、18%であった。この結果から、

表3 学習回避動機の学年、男女別の承認率(「はい」の%)

項目 番号	2年生			4年生			6年生			男児	女児
	男児	女児	合計	男児	女児	合計	男児	女児	合計		
①	46	41	43	47	33	40	28	22	25	40	32
②	61	61	61	81	87	84	84	80	82	75	76
③	42	61	52	66	55	61	59	71	65	55	62
④	22	37	30	26	16	21	18	11	15	22	21
⑤	29	35	32	47	20	34	33	20	27	36	> 25
⑥	15	29	22	36	15	26	28	7	18	26	> 17
⑦	24	31	28	31	31	31	33	20	27	29	27
⑧	24	31	28	19	15	17	24	20	22	22	22
⑨	42	45	43	44	35	39	39	29	34	41	36
⑩	61	51	56	84	73	79	77	76	76	74	66
⑪	10	20	16	11	6	9	12	0	6	11	9
⑫	42	35	38	32	26	29	28	33	30	34	31
⑬	39	47	43	57	51	54	75	60	68	57	53
⑭	42	37	39	31	22	27	43	44	44	38	34
⑮	22	31	27	21	13	17	26	4	16	23	16
⑯	34	39	37	45	20	33	18	4	12	32	> 21
⑰	32	33	32	32	46	39	51	38	45	38	39

2年生では叱責よりも称賛の方が動機づけの手段として著しく効果的であるが、他の学年では称賛、叱責ともにあまり有効でないことが示唆される。

表3は、学習回避動機について学年別、男女別の承認率を示したものである。3(学年)×2(性)の分散分析を行ったところ、合計欄に太字で示したように8項目で有意な学年差があった。宿題が多いとき(②)と授業時間が延びたとき(⑩)は2年生から4年生にかけて承認率が増加しており、高学年になると宿題が多くなったり、授業時間が延びることを反映している。また、気分が悪いとき(⑬)は学年とともに増加しているが、この質問内容はあまり明確でないので説明しにくい。授業が進むのが遅いとき(①)は6年生で減少しており、当てられて答えを間違えたとき(④)、問題がやさしいとき(⑪)および手を挙げても当てられなかったとき(⑯)は学年とともに減少している。これらは、高学年になると挙手をして答えることにあまり関心がなくなること、問題がむずかしくなること(③)によるものと考えられる。

学年ごとに17項目の承認率の平均とSDを出してみると、2年生から順に37%(SD=12)、38%(SD=21)、36%(SD=24)であり、平均はほぼ同じであるが、SDは2年生が最も小さく6年生では2年生の2倍の大きさである。この結果から、高学年になると項目によって多くの子どもが承認するものと、わずかな子どもしか承認しないものがあることがわかる。各学年で承認率が高い方から3項目を調べてみると、3学年とも一致しており、宿題が多いとき(②)、問題がむずかしいとき(③)および授業時間が延びたとき(⑩)であった。したがって、これら3つが小学生における学習回避動機の代表的なものであり、これらについては、学習指導に際して留意しなくてはならない。

男児の平均承認率は38%、女児は34%であって、男児の方が勉強がいやになる傾向があるが、有意な性差があった項目は先生に叱られたとき(⑤)、宿題を忘れたとき(⑥)および手を挙げても当ててもらえなかったとき(⑯)であり、このようなときに女児よりも男児の方がくじけやすいことが示唆される。項目⑤と⑥に忘れものをしたとき(⑮)と問題がやさしいとき(⑪)を加えた4項目では交互作用が有意であった。いずれも、2年生では女児の方が高く、4年生と6年生では男児の方が高いことによるものである。

**学業成績および知能と学習動機の関係** 学業成績(素点)および知能(IQ)がそれぞれ高い方から2年生と6年生では25名ずつ、4年生では30名ずつを選び、成績上位群、知能上位群とした。逆に、低い方から25名または30名ずつを選び、成績下位群、知能下位群とした。各項目について2(上位群、下位群)×2(「はい」、「いいえ」)の $\chi^2$ 検定を行った。

表4は、有意な関係が得られた学習接近動機の項目を示したものである。学業成績について有意差があった項目数は2年生が7、4年生が24、6年生が4であって、4年生が著しく多いが、この学年差については現在のところ説明することが困難であり、今後さらに検討する必要がある。以下では、この表から全体として読みとることができそうな点について述べることにする。まず、上位群の承認率の方が下位群よりも高い項目(Ⓞ印のもの)は、いろいろ調べるのが好きだから(④)、問題を解くのが好きだから(⑨)、新しいことを知りたいから(⑩)といった内的動機を

示すものであり、逆に下位群の承認率が高い項目（\*印のもの）は、宿題があるから（②）、先生に叱られるから（③）、親に叱られるから（⑭）といった外的動機を示すものである。したがって、成績のよい者は内的動機により、成績の悪い者は外的動機によって勉強しているといえそうであるが、例外があることに注意しなくてはならない（②、④、⑭）。また、教科書を読むのが好きだから（⑬）は内的動機と考えられるが、4年生と6年生では全く逆の結果である。すなわ

表4 学業成績および知能と学習接近動機の関係

項目 番号	2 年 生					4 年 生					6 年 生				
	国語	社会	算数	理科	全体知能	国語	社会	算数	理科	全体知能	国語	社会	算数	理科	全体知能
②		*				*	*	*		*	⊙				
③		*				*									
④		⊙				*	⊙	⊙		⊙	*				
⑤						*									
⑦		*				*								*	
⑨						⊙		⊙		⊙					
⑩							⊙	⊙		⊙					
⑪						*									
⑬						⊙	⊙	⊙		⊙	*	*		*	
⑭		*	⊙	*	*				*	*					

\* 下位群の承認率>上位群承認率    ⊙ 上位群の承認率>下位群承認率

表5 学業成績および知能と学習回避動機の関係

項目 番号	2 年 生					4 年 生					6 年 生				
	国語	社会	算数	理科	全体知能	国語	社会	算数	理科	全体知能	国語	社会	算数	理科	全体知能
②	*		*												
④	*	*	*	*	*	*				*	*	*	*	*	*
⑤	*		*	*	*	*				*	*	*	*	*	*
⑥						*	*		*	*					
⑧	*	*	*		*	*			*	*					
⑨			*					*							
⑪	*		*		*										
⑫					*			*	*	*	*	*	*	*	*
⑭								*	*	*					

\* 下位群の承認率>上位群の承認率

ち、4年生では成績上位群の承認率が高いのに6年生では下位群の承認率が高くなっている。いずれにしても、学習接近動機と学業成績の関係は学年や教科によって異なることが示唆されるので、今後さらに検討する必要がある。知能については、④、⑦、⑭のいずれの項目においても、知能の低い者の方が承認率が高かった。

表5は、学業成績および知能と学習回避動機の関係を示したものである。表から明らかなように、有意になったすべての項目において学業成績の悪い者、知能の低い者の方が学習回避動機が強い。学業成績について有意差があった項目数は2年生が19、4年生が17、6年生が10であり、6年生が最も少なかった。当てられて答えを間違えたとき(④)と先生に叱られたとき(⑤)はどの学年にも有意差があり、小学生を通じて成績の悪い子の特徴であると考えられる。次に、授業が進むのが速いとき(⑧)と親に叱られたとき(⑨)は2年生と4年生で、テストの点が悪かったとき(⑫)は4年生と6年生で有意差があり、それぞれの学年の特徴を反映していると考えられる。3学年をこみにして教科別に合計してみると、国語11、社会5、算数11、理科8となり、国語と算数で有意差のある項目が多かった。学習接近動機と同様に、学業成績との関係は学年や教科によって異なっており、今後さらに検討する必要がある。知能については、6年生では有意差がなかったが、2年生では⑤、⑧、⑫の3項目、4年生では④、⑤の2項目で有意差があった。

以上のように、学習動機は子どもの学業成績によってかなり異なっているが、その動機は成績のよい子どもあるいは成績の悪い子どもが本来的に持っているものであろうか。筆者はそうは考えない。子どもの学習動機は、教師や親による学習への動機づけの手段や指導の仕方を反映するものである。たとえば、成績のよい子どもは内的動機により、成績の悪い者は外的動機によって勉強しているといっても、成績の悪い子に対しては宿題を強制したり叱責することが多いであろう。また、成績の悪い子どもは答えを間違えたとき、先生に叱られたとき勉強がいやになるといっても、毎日の授業において教師からそのような扱いを受けているのである。学習接近動機や学習回避動機を改善するには教師や親のあり方を変えていかななくてはならない。

## 要 約

小学校2、4、6年生303名に、学習接近動機を調べることができる14項目と学習回避動機を調べることができる17項目を実施し、学年差、性差、学業成績および知能との関係を分析した。その主な結果は以下の通りである。

(1) 大人になって役に立つから、テストで良い点をとりたから、新しいことを知りたいから勉強するというのが、小学生に共通する学習接近動機である。

(2) 外的動機を示す項目だけでなく、内的動機を示す項目も学年とともに承認率が低下する。

(3) 偉い人になりたいから、親に叱られるから勉強すると答えた者は男児の方が多く、友達に負けたくないから、教科書を読むのが好きだから勉強すると答えた者は女児が多い。

(4) 学業成績の良い者は内的動機によって、成績の悪い者は外的動機によって勉強する傾向があるが、学業成績や知能と学習接近動機との関係は、学年や教科によって異なっている。

(5) 宿題が多いとき、問題がむずかしいとき、授業時間が延びたとき勉強がいやになるという



のが、小学生に共通する学習回避動機である。

(6) 宿題が多いとき、授業が延びたとき勉強がいやになると答えた者は2年生から4年生にかけて増加し、当てられて答えを間違えたとき、問題がやさしいとき、手を挙げても当ててもらえないとき勉強がいやになると答えた者は学年とともに減少する。

(7) 先生に叱られたとき、宿題を忘れたとき、手を挙げても当ててもらえなかったとき勉強がいやになると答えた者は、女兒よりも男児の方が多い。

(8) 学業成績の悪い者、知能の低い者の方が学習回避動機が強いが、学業成績や知能と学習回避動機の関係は学年や教科によって異なっている。

(9) 当てられて答を間違えたとき、先生に叱られたとき勉強がいやになるというのが小学生を通じて成績の悪い者の特徴である。

一般に、子どもの学習動機は教師や親による動機づけの手段や指導のあり方を反映しているので、本研究の結果を参考にして、学習接近動機および学習回避動機の改善を図る必要がある。

## 引用文献

- 杉村 健 1967 小学校4年生と6年生の学習動機 奈良教育大学教育研究所紀要, 3, 45-52.
- 杉村 健 1968 小学生の学習動機 奈良教育大学教育研究所紀要, 4, 29-34.
- 杉村 健 1973 へき地における小学生の学習動機 奈良教育大学教育研究所紀要, 9, 91-98.
- 杉村 健 1985 小学生の学習心理 東京:教育出版
- 杉村 健・藤田 正 1971 児童の学習不安と学習動機 奈良教育大学教育研究所紀要, 7, 101-108.
- 杉村 健・栗山広治 1972 沖縄における小学生の学習動機 奈良教育大学教育研究所紀要, 8, 81-86.
- 玉瀬耕治・杉村 健 1985 教科の好き嫌いと原因帰属, 学習動機の関係 奈良教育大学教育研究所紀要, 21, 105-114.

<付 記> 本研究を行うにあたり磯城郡川西町立結崎小学校の協力を得ました。資料の収集には心理学専攻の大学院生、4回生および3回生、統計的分析には3回生の上田いずみ、野本陽子、福田久子の協力を得ました。心より感謝します。